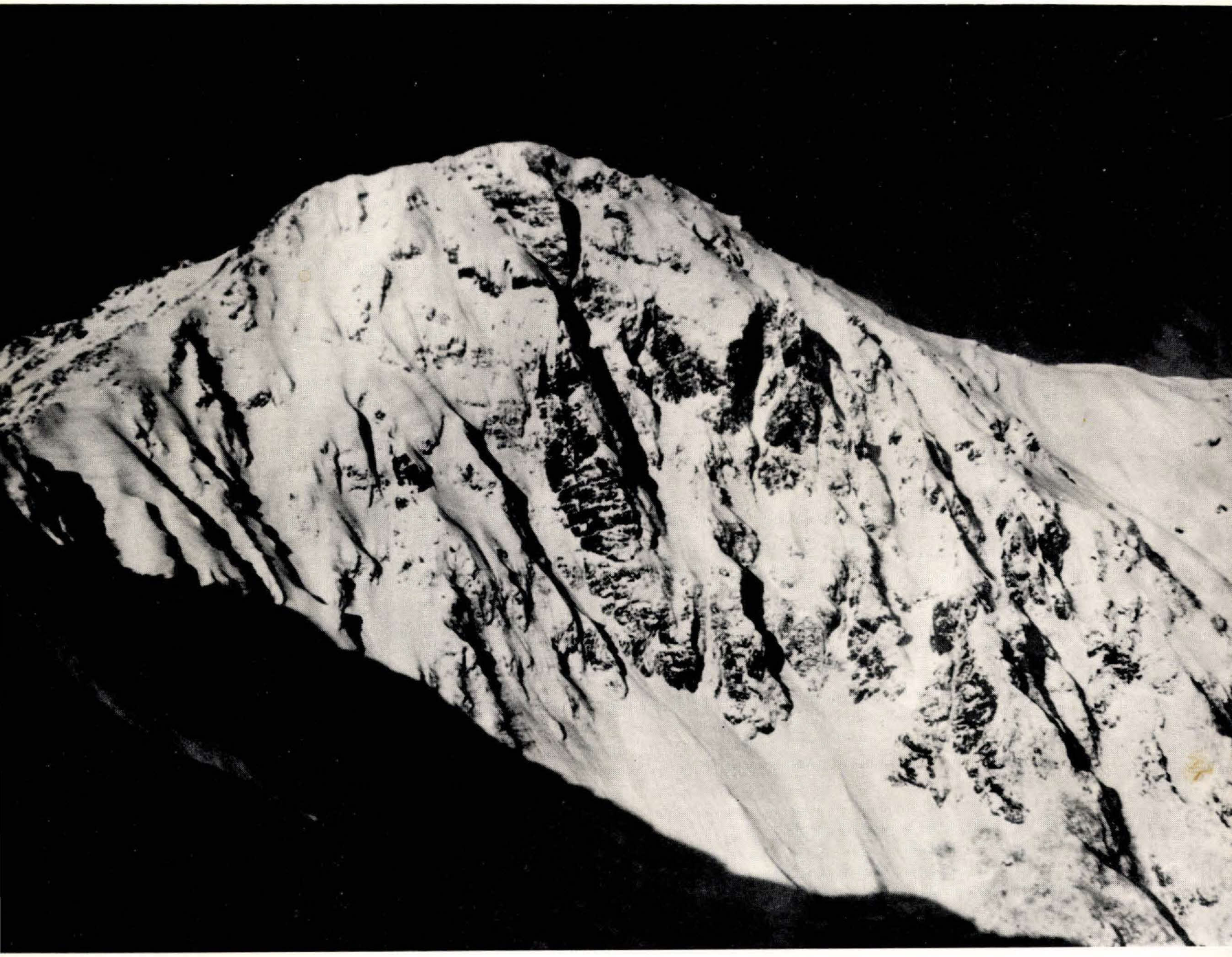
針葉樹会報



復刊第29号

発行日
1971年6月30日
発行所
針葉樹会
印刷所

針葉樹会報
復刊第29号

編集人 岡田健志
千代田区丸の内1－3－2
住友化学工業㈱東京支社
第2ポリエチレン課

エヴェレスト街頭

冠木伊右衛門

針葉樹会の記事となれば、登山のことを書かなければならないのに、私の場合は、高さこそ富士山より高い所に寝たので家内は眠れなかったと云う。シェルパは我々の年を考慮には入れてないらしい。次の日はキランティも色々知恵を借りた中島君から、何か書けと云はれゝば書かないわけにはゆかない。そこで六十五才と六十才の老夫婦がエヴェレスト街道のトレッキングで、どんなことがあったかを少し書くことにしました。

昭和三十九年七月八日の日附で、深田さんのヒマラヤの高峯第一巻にこんな文句が書きこんである。「訳もなくヒマラヤに惹かれる。手当り次第にヒマラヤの本をあさった。何時の日かヒマラヤを此の足で踏みたい。」

この夢が実現して去年の十月十四日、我々二人でカトマンズを出発した。どうせスポンサーがあるわけでなし、誰にも責任を感ずる必要はなし。無理と分ったらどこでも止めようと云う呑気な旅だ。

最初の日はバスでラムサンゴ迄行ったが、十時発のバスがカトマンズを出たのが十一時五十分。先ずネパールの悠長さに驚いたり、あきれたりした。併しラムサンダルの大きさに、今更ながらびっくりしながら苦しい上りだ。この日から家内は相当参った。その夜は民家の軒先での キャンプは寝るのが惜しいような月夜だった。

次の朝から、シェルパ一人、ポーター三人を引連れて殿様旅行。それにしても、日中の暑さと、山の スケールの大きさに、今更ながらびっくりしながら苦しい上りだ。この日から家内は相当参った。その夜は民家の軒先に寝たので家内は眠れなかったと云う。シェルパは我々の年を考慮には入れてないらしい。次の日はキランティチャップで泊り。これはとんでもないことになった。この先十五、六日はかゝるのに、家内が果して歩けるだろうか。ポーターを一人付けてカトマンズへ返そうか。それにしても言葉は全然通ぜず、廿日以上もカトマンズのホテルで待てるだろうかと心配になって来た。ところが三日目には私が暑さにやられて気息えん／＼。恥も外聞もあらばこそ、ランニングにステヽコ姿、ふら／＼だ。我々の雇ったシェルパはどうもよく英語が分らない。何を云付けても、「オーケーサー」と云うが、てんで別の事ばかりやる。その上我々二人を残して、どんどん先行してしまふ。私の懐には少しばかりの小銭があるだけで、金は全部ポーターの鞄に入っている。丁度ラムサンゴから道連れになった、カルカッタから来た印度人が居たので、「我々のシェルパはよく英語が分らない。今夜は次の部落で泊るから、そこで待て。若し先迄行って居たら戻れと云ってくれ」と頼んだ。さて、次の村に着いて見ると、シェルパもポーターも居ない。今に戻るだろうと道傍にごろりと寝ころんで見たが、三時も過ぎると段々暑さも衰えて、ランニング一枚では寒くなる。腹もへったが食うものもない。婆さんから手真似で漸く卵を二つ買ってすすりシェルパの来るのを待つ。「このまゝ荷

物を持逃げされたらどうするの」、と家内が心配し出した。「何とかなるさ」とは云っても心細い。日は段々傾いて寒くなった頃、遙か彼方から二人の人影が見える。シェルパかなとは思ったがはっきりしない。何回か見えたり、かくれたりしてやっぱりシェルパとポーターが一人来た。「キャンプ地迄もう何分かゝるのか」ときくと、「もう五分だ」と云う。処が三十分かゝって漸く着いた。シェルパの時間は全くあてにならない。併しその夜は気持のよいカルカで月が皎々と輝いて居た。

次の日からはペースをぐっと落し、四日歩けば一日休養とし、途中蛭に吸付かれたり、虱にたかられたりして、乞食のような殿様旅行もカトマンズを出て、十七日目の十月卅日にナムチェに辿り着いた。途中のことを一々書いては長くなるので省略する。

ナムチェのすばらしさは、今更私がこゝに書く必要もあるまい。家内と二人で、よくまあ気の遠くなるような十七日間のトレッキングをやったものだと、我ながら感心した。併し家内の体力は限度に来たようだ。次の日は一日中寝てばかり居た。無理は禁物だ。こゝで止めようと決心したが、シェルパが云うには、「タンボチェ、ベリーナイスプレース、トモロウ　ロード、ノーアップ　アンド　ダウン」と云ふので、それではとタンボチェ迄行くことにした。併し「ノーアップ　アンド　ダウン」の道はやはり深い深い谷を一つ渡らなければならなかった。併し天も我々老人を憐れみ給えるか、それ迄は、十時頃から次第に雲が現はれ、午后は山を包んでしまったのに、この日に限って少しも雲が現はれない。すばらしい雪の山を眺めながら、タンボチェゴンパの門をくゞった途端、前面にはヒマラヤの屛風がそゝり立っていた。全く息を呑む絶景に見とれ、シェルパにだまされて、ここ迄来たことを喜んだ。

あれがエヴェレストだとシェルパは云ふが、今迄どの山を見てもギャチュンカンだと云ふ彼の言葉は信用出来ないので、まさかエヴェレストとは思はず、ホテルへ帰って本を調べて初めてあれがやはりエヴェレストだったのか、と云ふうかつさ。全く恥かしい話です。山の名はどうであろうと、夕日に映えるヒマラヤの眺めを満喫して、その夜はレストハウスに泊ったが、その夜の寒さも亦きびしく、中島君が羽毛服だけは持って行った方がよいと云ったのに、カトマンズのホテルで、それ迄は必要あるまいと云ったのを信用したことを悔いても後の祭。二人でローソクの火に手をかざして、ぶるぶるふるえながら夜明を待つ辛さ。全く地獄だ。

四時半頃ポーターが火を焚き出したので飛出して火にあたり漸く人心地になった。東の

目　次

○エヴェレスト街道……冠木伊右衛門 (1)
○身辺雑記(2)……………吉沢一郎 (3)
○北岳バットレス四尾根…佐藤久尚 (5)
○避衆大菩薩峠…………村尾金二 (8)
○新入会員紹介………………… (9)
○現役部員紹介………………… (9)
○会津朝日岳…………望月達夫 (10)
○現役活動状況………………… (10)
○会務報告……………………… (11)
○編集後記……………………… (14)

身辺雑記（二）

吉沢一郎

一九七一年二月十四日午前十一時半、N・G・ダイレンファースとJ・O・M・ロバーツが統率する一九七一年度国際隊（エベレスト南西壁直登）にカトマンズで落ち合う植村直己と伊藤礼造の二名が、日本山岳会から選ばれた隊員として羽田を出発していった。

伊藤君は、グランド・ジョラスで重い凍傷を受けた小西君の代役であったが、当の小西君も車椅子に乗せられて多くの見送り人の中に交っていた。その胸中や察するに余りあるものがあるが、登山とは何ぞやという基本的な問題を再考しなければならない多くのものを残しているので、こゝでは敢えてその先を言うことを止めにしておこう。

この同じ時に高橋照君の率いるマナスル西壁隊の五名がテル君を含めて出ていった。この隊は西壁から頂上に登り、ことによると旧ルートを通って登ってくる韓国隊に会い、途中同隊の張ったテントに泊りながら、サマの部落に下りてくることになるかも知れないという。予定通り運んで目出度し目出度しということになってもらいたいものである。なお、この間誕生したばかりの和製プロガイド組合に属する安久一成君がこの韓国隊に傭われて同行するらしい。

ガイド組合といえば、それの発起人の一人である服部満彦君の前に、ダウラギリー山群は世界の登山隊が寄ってたかって攻め始めてきているので、近いうちに七〇〇〇m級の未発峰はなくなってしまうであろうし、それも日本隊のみによって攻略される可能性も大きい。

しかし、ダウラギリー山群は大きなナダレの出ることによって悪名が高い。アメリカ隊やオーストリア隊のようなことを二度と繰返してもらいたくないものである。

余談ではあるが、ダウラギリーの高度に面白い組合せのあることを発見した。主峰の高度（八一六七m）を逆にしたのがV峰の高度（七六一八m）。II峰とIII峰は最後の二桁を逆にしたもの、即ち七七五一mと七七一五m（七二六八m）の数字はIV峰とVI峰の西のコルから一九六九年に、オースいう。予定通り運んで目出度し目出度しといがない。

空が段々ばら色に変り、雪の山々が日を受けて赤くなると忽ち地獄は又天国に変った。二度と見ることもあるまいと、食入るようにこの絶景を眺め八時遂に帰路に着いた。

それから三日目の十一月四日朝ルクラに着き、廿二日間のトレッキングは終った。

ルクラで飛行機の世話をして居たのがチョタレーだ。中島君を知ってるかと云ったら、よく知ってると云うような訳で、大変都合がよかった。

こゝに飛行機を一週待ってたと云う二人の若い日本人が居た。初めは日本人とは思はなかった位のシェルパ顔になって居た。今日は日本人の女が来ると、昨日聞いたと云ったが、来たのが婆さんでは二人はさぞがっかりしたろう。それでも自由に日本語が話せると云ふことはお互に楽しいことで、我々の宿の前の広場で、ヒマラヤの雪山を見ながら、昼から焼鳥でロキシーやチヤンを呑み、チョタレーも加はり、しまいには村中集まって来て、夜中まで呑めや唱えの大騒ぎをやった。その若い日本人の一人、日体大の中村博之君は、吉沢兄をよく知ってると云ふ。山屋は山屋で、どこかで糸がつながってるものだと感心した。

（四六、一、一六）

トリアの登山隊が五人、シェルパが一人行方不明になってしまったが、この山は実に厄介な相手らしい。七〇年に関西登高会（プレ）と福岡山の会（ポスト）が狙ったが、両隊とも断念してしまった。

しかし前者はVI峰の初登（四月十七日）に成功したし、後者はジャンクション・ピークの真相を発見し、その手前にある七一五〇mを賑わしたのは大阪大学のピーク・29であろう。峰に初登してガマ峰と命名した。

静岡のチューレン・ヒマール隊は東峰には登らなかったが、中央峰と西峰（三峰とも七三七一mと見做されていう。尚、東峰は七〇年の四月か五月に韓国隊が登ったというが、どうも少し怪しまれている節がないでもない。

この頃はありていに言えば、日本から世界中の山、特にヒマラヤへ出かける隊が多過ぎるようである。全部で何隊になるのか、推薦状を出した数は日山協へ行って聞けばわかるが、トレキングだか山登りだかわからないような隊もあるし、申請書は出したが許可がどうなっているのかはなかわからない。出かけたところをみると許可が来たのかと思うこともある。

だから大勢は結果で整理するなる。われわれがこういう状態だから外国人がわれわれからの情報を首を長くして待っているということにもなるなずけよう。

昨年のポストや住吉君も頭を傾げてとして残っていくことであろう。

尚、今年の夏には七二〇〇m以上峰の高山表が、ディレンフルトとA・ボリンダーの協力によって発表されることになっている。大いに期待してよいと思う。

――〇――

（九頁より続く）

コッ〳〵〳〵と聞こえるからキツツキがこの辺にいるのかと思ってたら、子供が今流行のクラッカーで遊んでるのだった。

落合から都水道局のマイクロバスに乗っけて貰って丹波で下りる。丹波のバス停の傍に大きな桜の木があって、満開で誘う風に花吹雪を散らしていた。登山者に一人も合はなかった完全避衆登山の旅も漸く終りに近づいていた。

番喜ぶのは、今は地下に眠る渡部洋君とシェルパのラクパ・ツェリンであろう。よいおくりものが出来たとわれわれも共に喜びたい。

それにしてもこの二人が相当のザイルを持ったまま、どうして滑落してしまったか。何故フィックスをしなかったか。これは水野君

永久の謎

北岳バットレス四尾根

佐藤久尚

就職して5年、30才に手のとどきかけた年齢、酒、煙草、睡眠不足の繰り返えしで真黒になってしまった肺、真赤にはれあがってしまっているだろう肝臓、そんなボロ／＼の生活の中にも北岳バットレスの四尾根ぐらいならまだ登れるだろうと思いつく気まぐれは残っていた。既に春頃から「来年の正月はバットレスに行くつもりだ。」とそれとなくアドバルーンをあげ、二、三の人には同行を誘ってみた。しかし夏頃まではこれといった反応は誰からも得られなかった。それがどこでどうなったのかは知らないが、秋口になり中島さん、加藤、宮武の両君が行くということになり、急激に今回の計画が具体化した。

十一月には宮武君とまず偵察に行った。この時はザイルを忘れてしまって試登の目的は果せず結局大樺沢経由で北岳往復だけとなってしまったが、それでも新雪に覆われた四尾根を間近に見て「これなら登れる」との感を一層強めることができた。そして十二月も慌しく過ぎ当初のメンバーに岡田君が加わりいよいよ大詰めを迎えた。

行動

十二月二十九日

仕事の都合で三十一日からでと休めない岡田、加藤、宮武の三君を残してまず中島さんと私が先発した。当時、中島さんは失業中でありいつでも時間の都合はついたし、私の方は普段、会社で大した仕事をしていないものだからこれまたいつからでも都合がつくという誠に喜ばしい状態にあった。

慌しい夜行をさけ、朝の電車で待ち合せて行くことにし久しぶりに重たいザックを担いで約束の急行に乗り込んだ。しかし、電車の中に中島さんの姿はみられなかった。後で分ったことだが、前日「八時一〇分発の急行」とだけ連絡を受けていたから、私としては、中島さんが住んでいる所（府中）からして当然中央線の乗車駅は「八王子」と考え「八時一〇分発」というのは八王子駅発の時間とばかり思っていた。ところが中島さんが考えていたのは「新宿駅」であり、たまたま同時刻発の急行が新宿と八王子の二駅にあったがための悲劇であった。

まあ、出足にちょっとしたトラブルはあったものの、このスレちがい劇も私が甲府駅で小一時間ほど待つことによりチョンとなり、その日はまずまず順調に深沢の出合まで歩を進めることができた。この間、途中の観音教トンネルが工事中のため甲府ー芦安ー観音教トンネル入口まで文明の利器利用、観音教トンネルより徒歩という行程。野呂川林道はどの記録をみても長くて単調なうんざりするような道とあまり評判は良く書かれていないが、私にとっては歩くのは初めてであり、めずらしさと秋のようならからかな天気とでうんざりする間もない道程であった。

十二月三十日（快晴）深沢出合ー砂払（テント地）

急な登りをただもくもくと登るだけの一日であった。池山小屋あたりまでは比較的楽であったが小屋を過ぎ尾根筋に出る頃からザックの重みが応えるようになった。平均年齢三〇才を越える二人でテント、ザイル、サブザイル、登攀用具それに三日分の食料と六〇キロ余の荷物を背負っているのだから無理からぬことではあった。

当初、テント地は、なるべくバットレスに近い八本歯のコルか、

少なくとも八本歯の頭あたりを考えていたが、砂払をよたよたと登り切った時もはやこれ以上先に進む気はなくなってそこにテントを張ることを決めてしまった。

そこはちょっとした台地になっており、すでに五つ六つのテントが張ってあった。いずれのテントにもヘルメットがポールの先にこれ見よがしにくくり付けてあり、バットレスを登るパーティーであることを物語っていた。

十二月三十一日（雪後晴）

昨夜からの雪は、午前中いっぱい降り続いて新雪が三〇センチぐらい積った。これでは明日、一日おいて雪の安定するのを待たないとアタックは無理かなと心配であったが、うまいことに二時頃になって雪がやんだ。早速偵察に出かけた。八本歯の頭まで登るとバットレスが手に取るように見える。

Eガリーからの Dガリーまでは一つの雪壁となり、五尾根はその雪壁の中に没してほとんど尾根としての形態をとどめていない。バットレス全体としてもさっきまで降っていた新雪に覆われているのだろうか思いのほか露岩の部分が少なく一つの巨大な白い幕のような感じであった。その中で四尾根だけが人工的とも思えるような鋭角的な姿を空間にそそり立たせており、そのフランケの中に走る黒い稲妻のような露岩が一層四尾根の姿を浮き上らせていた。

我々には、さし当って四尾根の取付点までのルート、即ちバットレスのトラバース・ルートの見当をつけることと、トラバース・ルート中の雪崩の危険性を見きわめることが必要であった。トラバース・ルートの方は簡単に見当はついたが、もう一つの雪崩の危険性の方は八本歯の頭から見ているだけでは分かろうはずはなかった。

ところが我々はこの偵察で一つだけ重大な発見をしたのである。というのは、たまたまこの時、バットレスの中、正確に言うならば四尾根をDガリー側から回り込み、ちょっとCガリー側に登った所でのろのろと動く人影を発見したのである。どうやらその人影は昨日四尾根か中央稜へ取り付いて一夜ビバーク後、何か事故にでもあって已む無く降って来たパーティーであろうと思われた。しばらく見ているとその人影は四尾根を回り込んでさらにDガリーのトラバースにかかろうとしている。既にあたりは薄暗くなりかけていた。我々から見れば、さっきまで雪が降り新雪が四〇センチも積った直後の沢に踏み込むなんて全く無謀としか思えなかったが、彼等としてはよほど切羽つまっていたのだろう。私は最初その人影をサーカスの綱渡りを見るような不安な気持ちで見守っていたが、そのうちにだんだん雪が安定しているから明日はアタックに出てもだいじょうぶだろうと思えて来た。

その晩テントに帰り、いろいろ相談した結果やはり明日天気がよければアタックに出ることにした。本来は、後発の岡田君達が入って来て皆がそろったうえでアタックに出るべきであったが、その時はそんな愁長なことを言ってはおれない事情があった。というのは中島さんはエベレストの遠征以来失業中であったが今度ようやく長銀に就職が決り、この四日が出社第一日目の予定であった。従って何んとしても三日には下山しなければならないことになっていたからである。

一月一日（快晴）　四尾根登攀

昨夜の猛烈な冷え込みが証明していたように一九七一年の元旦は

快晴のうちに開けた。アタックにしては少々遅い時間であったが、六時二〇分にテントを出たら既に八本歯のトラバース地点まで行くと既にトレースがあり五、六ピッチ先を一パーティーが、さらにEガリの中にもう一パーティーがいた。我々は早速アンザイレンしてトレースを追った。たちまち一パーティーを追い越し先頭のパーティーにせまった。このパーティーは静岡山岳会の人々で、早朝の四時からこのトラバースにかかっているそうだが、三時間たった今でもまだ五尾根を回り込む地点にさえも到達していない。なるほど見ていると雪が深く腰まで埋まりながらのラッセルに悪戦苦闘している。しばらくはそのパーティーの後について様子を見ていたが五尾根を回り込むあたりで「ラッセルを交替しましょう。」とか何んとか言って我々が先頭に立った。このパーティーは追い抜かれたことがよほどくやしかったのであろう。がしに「大学生のパーティーより我々の方が馬力においても技術においても一枚上手だったのだからしかたがない。追い越されてから彼等は必死になって我々の後を追って来たが、新しいラッセル及びステップを切って進みながらも終始、我々の方が早かった。そして途中第二コルで彼等が一度我々に追いついた時「おたくさんらみてそこがテラスであ早いですねェー」と感心しまあそんなことはどうでもいいが、とにかくその日、いや一九七一年の四尾根登攀では我々が一番最初であったのである。Dガリーをトラバースし四尾根を回り込んでCガリー側の岳樺まじりの雪壁と取付テラスに出た。この取付テラスは夏であればかなり広いのんびりした台地であるが今は一つの雪壁と化していた。それでも雪の盛り上り具合から、いよいよ四尾根の開始である。まず中島さんがトップ。最初の出だしは、夏でも岩が一段高くせり上っていてちょっと手こずるところであるが、今は雪が付き全く不安定な場所になっていた。中島さんは登って一つ一つ丹念にステップを切り登り切ったが、腕力の消耗が激しく時としてピッケルを振ることさえあった。四ピッチ目はリッヂ。所々、雪を全部かき落して下の岩を出さなければならない部分もあったが大した困難もなく第二コルに着いた。次のピッチはコルからカンテに乗り出すところが悪かった。このピッチは中島さんがトップであったが、一歩踏み出したところで落ちかけてアイゼンの爪で突き刺すなりそのままマッチ箱へザイレンでコルへ降る。マッチ箱の頭からはアップしていたが、降り立ってみてそこが雪に埋もれあまりにも狭ま苦るしくなっているのをみて食事はとりやめ休む間もなく登りにかかった。しかし、四尾根の登攀もここまで来れば8割方終ったようなものであり気が楽であった。そこから二ピッチで夏の登攀終了点のはずであったが、二ピッチ登っても、まだ雪壁の傾斜はおちないのでさらにもう一ピッチザイルを伸ばしてようやく終了となった。

後はラッセルして稜線まで出るだけであった。八時間ぶりにザイ

ルを解きボソボソになったパンをつめ込んで登りにかかった。あたりはガスが立ちこめ既に夕闇がせまっていることを物語っていた。最後の登りは下の部分は、雪が深く、残ったスタミナを消耗させるに十分であったし又、上部はフワッとした雪と足を一歩踏み入れるとパサッと切れ落ちる雪板のミックスしたいやらしい斜面であった。それでも、どうやら無事稜線に出て北岳の頂上を踏み暗くなる寸前にテントに帰りついた。

××××××××

なおこの後、遅れて入って来た岡田、加藤宮武の三君の行動を簡単に紹介すると、彼等は三十日の夜行で新宿をたち、甲府ー早川橋ー西山温泉経由で入山し、我々が四尾根を登って帰って来た日即ち一日の夜ハッパヨレヨレの状態でテントに到着した。そして翌日は三人そろって北岳を往復しさらにその翌日（一月三日）には加藤、宮武君がやはり四尾根の登攀に成功した。加藤、宮武の両君は早朝五時頃テントを出発し夏とほとんど変らない時間で四尾根を登り切り早くも昼の二時頃にはテントに帰り着くというスピードぶりであった。

（以下一四頁二段につゞく）

避衆大菩薩峠

村尾金二

「そこに山があるから」でも登る。比の頃は「そこに人がいないから」で登り度い。避暑、避寒の旅行がある。そこで、いみじくも藤島敏男氏が避衆登山を提唱した。

場所的に云えば、人の余り登らない山、登っても人の少いコースを選ぶ。時季的には人の登らない季節。日を選べば週末、日曜はさけて週日にする。連休よりも連休後に出かける。常識的に云えば、夏、スキー場に行き、冬、海水浴場に行くと云う考え方が基調になる。

一九六八年六月十一日（火）に柳沢峠から六本木峠、丸川峠を越して大菩薩嶺に出て峠に下りた。途中誰にも会はず、峠の小屋の留守番が一人いた丈けだった。無理に頼んで泊めて貰う。十二日（水）小金沢山、黒岳を越して焼山に下りた。

今年もそれに味をしめて、四月二十日（火）近藤、F、I、私四人で奥多摩に行く。氷川の名がなくなったのが淋しい。タクシーで丹波に向う。湖畔に少し遅い桜が満開で、観光客のいない通りに静かに咲いているのが何とも云えず美しい。

丹波の部落の入口で左に折れて越ダワで下車。そこから急坂を登り、よく踏まれた昔の峠道を行く。ワサビ沢、追分、ノーメダワ、フルコンバ、ニワタンバを経て疲れた身体でやっと峠に出る。午後四時。天気は好い。当にしていた小屋の留守番がいなくて、ヒッソリ閑としている。勝縁荘まで下りれば誰かいるだろうと、下りて大きな屋根が見える所に来た。行って見ると戸は閉っている。もう少し下りて見よう。「冬でも温いバンガロー」と書いてある富士見荘に来ても比の春先に誰もいない。福ちやん荘なら誰かいるだらうと下りた。煙突から煙が出てなきや駄目だろうと云ってたら煙も出ていない。ベンチに腰を下して顔見合して笑い出した。人がいないにしてもいなすぎる。文句を云はうにも云う相手がいない。

若しこの下、長兵衛小屋にいなかったら、裂石か嵯峨塩ならいるにきまってるが大部遠

くなる。傾く日射しを眺めて溜息をつく。自動車道の終点に長兵衛小屋があって上から見ると煙が出ていない。矢張り駄目かと思ったら、先に行った近ちゃんが大丈夫と云う。兎に角、人がいて泊ることが出来た。

長兵衛小屋は二階建、可成り大きい建物だ。入って二階の六畳間に通される。よく見たら二階に六畳間が五つあった。下は大きい広間で詰めたら相当泊れるらしい。

その広間に賞状が額に入って二つかかっていた。一つは日本大学理学部か何かで、動植物採集に協力を感謝するとサインペンで書いたもので、其の横に綺麗に整理された蝶の標本の箱が六、七箇かかっていた。もう一つは甲府警察署からで先年の赤軍派逮捕に協力を感謝すると云うものであった。出来れば避衆山岳会からも、行き暮れての宿泊御協力の感謝状の一枚も送っても好い位と考えた。

二十一日（水）始めは長峰を通って和田、猿橋に出るつもりだったが比処まで下りたとなると石丸峠まで登るのが嫌になり裂石に下りて柳沢峠から鶏冠山に行こうと云う事になる。七時五分発。下り一時間半と書いてあった。ツラヌキ谷を下りて八時三十五分裂石に出たら丁度バスが登って来た。柳沢峠でバスを下りて前に通った六本木峠から今度は右に折れて鶏冠山に向ふ。ハンノ木峠から鶏冠山道は、実は大正十四、五年頃、なくなった渡辺九郎さんと登ったことがありその時書き込んだ古い地図の赤い線に右斜面をユルク登ると全く同じだったのには驚いた。鶏冠山の岩峰の方に廻りこみ、また引返して三角点のそばで春日の下、うつら〳〵と過した時は しかった。またハンノ木峠に戻り落合に向う。村の近くで学校の大きな屋根が見える。（以下四頁につゞく）

新入会員紹介

昭和四六年は左記二名が卒業、新たに会員になりました。

戸川哲哉　(勤) 中央区日本橋通一―一一　ニッカウイスキー㈱東京支店販売第二課電二七一―〇三三一
　　(住) 横浜市保土ケ谷区権太坂四六七　ニッカウイスキー保土ケ谷寮電〇四五―七二一―三七〇一

金子晴彦　(勤) 日本航空㈱営業本部東京支店国際貨物課電二一三―一四一一
　　(住) 杉並区天沼一―一九―一五

現役部員紹介

L・C	井草長雄	(社四・山三)
S・L	羽部敏夫	(社三・山三)
マネージャー	松尾信孝	(商三・山五)
	西牟田伸一	(商四・山五)
	藤巻悟	(社四・山五)
	西田研志	(法三・山一)
	前神直樹	(社一・山一)
	高橋史郎	(経一・山一)
	工藤英夫	(社一・山一)

以上

会津朝日岳

望　月　達　夫

会津駒ケ岳から北へ窓昭山、平ケ岳、荒沢岳から大鳥、未丈、毛猛、いて、さらに恰好のいい丸山岳から岩場記号深草、守門、御神楽岳までが、多くの雪を残の多い会津朝日岳へ山波がつらなっていることは、この辺の山域に関心ならよく知っている筈であ年の連休に藤島先輩と二人日は混む汽車を避けて、島へ行き、駒止峠を越えて檜枝岐へ行くバスを山口で乗換え、只見の手前の黒谷で下車して、早春の気のみなぎる山村風景をめでながら徒歩約一時間、白沢の孤村に泊る。三日は、連休中最良の天候に恵まれ六時に出発して一時間後には雪の上を登ることゝなり、「カノーのタカテ」で尾根に出て、ようやく周囲の山々が見えだし、残雪に飾られた、堂々たる山容の朝日の頂上へは、急な雪の斜面を登って十二時半頃に辿り着いた。高度僅か一六〇〇余メールに過ぎない山ではあるが、流石音にきこえた豪雪地帯にあるだけ、残雪の量は夥だしい。山腹を包むブナの原生林もまだ芽ぶきは見られない。併し山頂からは魚沼三山、平ケ岳、荒沢岳から大鳥、未丈、毛猛、深草、守門、御神楽岳までが、多くの雪を残してずらりと居並んでいるさまは、遥々やって来た甲斐があったとつくづく思ったことである。

連休と雖も、幸い山頂に人は居らず、途中で往き会った登山者も十指を僅かに超える程度。まことに静かな、佳い春の山であった。

翌四日は朝から雨、若し晴天でも七十五歳の藤島さんを二日に亘って、長時間上下させることはどうかと思い、低い峠越えを考えていたが、春雨を幸いに本名の無人駅から二キロほど歩いて湯倉温泉に行って、鉄分の赤いお湯につかり心身ともにのびのびとくつろいだ。そして五日は午後から晴れてきた。会津の斑雪の山々を眺めながら、また田島からバスで山王峠を越え、新藤原の駅前で残りの食糧を平らげ、すいた電車で塵の都へ戻ったのである。

（一九七一・五・一五）

現役活動状況

☆栂池スキー合宿（四五年一二月二五日～四六年一月二日）

参加者　C・L・金子以下六名

栂の森ゲレンデの下端にテントを張り、技術コーチもないままに練習に励んだ。プロコーチの無料聴講に成功し、六人中四人までがクリスチャニアをマスターした。諸先輩のチャレンジを待っています。

× × × × ×

☆遠見尾根（個人山行）（四六年三月二六日～二九日）

参加者　松尾・羽部・加藤（O・B）

遠見小屋近くに幕営し、スキー一式を三人で奪い合い楽しむ。上へは大遠見まで行く。下山では、スキーで下った人より歩いた二人の方が速かった。

× × × × × ×

☆新人歓迎山行（四月二七日～五月三日）

参加者　C・L井草以下六名

新人部員二名を得て雪の鳳凰三山縦走後、白鳳峠より広河原に下り、大樺沢で雪上訓練を実施。

会務報告

（昭和45年6月～46年5月）

大賀一郎

○平川氏遭難対策
昭和45年6月28日～7月5日
会員、部員二十数名が参加。詳細は会報30号にて報告予定。

○幹事会
昭和45年7月13日
出席　中島寛、竹中、岡田、池知、佐藤久、加藤、大賀
議事　年次総会準備

○評議員会
昭和45年7月17日
出席　中川孫一他評議員、幹事
議事　年次総会上程事項の審議

○45年度年次総会
昭和45年7月24日
（報告書別途配布済）

○北アルプス昔を偲ぶ会
昭和45年8月21日～24日
場所　鏡平周辺及び滝谷
参加者　山田亮、宮武、山本溢、大塚
佐藤久、池知、高崎、岡田、加藤、日江井、石、中島寛、加藤
出席　望月、中川孫、吉沢一、鉾木英、久保
松下、伊藤恙、竹中、加藤、大賀（以上評議員）、中橋、金子、藤巻（以上幹事）、金子、藤巻、羽部、神谷
議題　OBと学生とのつながりのあり方について

○評議員会
昭和45年9月29日
場所　如水会館ロビー
出席　中島、佐藤久、池知、高崎、中橋、竹中、井草、加藤、岡田、大賀、（学生）金子、藤巻、羽部、神谷
議題　甲斐駒遭難対策協議

○拡大幹事会
昭和45年9月9日
場所　如水会館ロビー
出席　中島、佐藤久、池知、高崎、中橋、竹中、中村雅、大、加藤、岡田、大賀、（学生）金子、藤巻、羽部、神谷
議題　甲斐駒遭難対策協議

若手OBと学生との懇談会
昭和45年9月22日
場所　如水会館
出席　原、池知、高崎、岡田、加藤、（学生）金子、井草、藤巻、羽部、神谷
議題　OBと学生とのつながりのあり方について

○会報発行（27号）
昭和45年9月29日発送

○臨時総会
昭和45年10月6日
（報告書別途配布済）

○遭難対策基金カンパ（中間報告）
昭和45年10月～

○遭難対策基金カンパ起案
○甲斐駒遭難対策活動
昭和45年9月2日～6日
（報告書別途配布済）

甲斐駒遭難を機にカンパを行ない、皆様のご協力によって、左記のように目標の五〇万円に対し、略八十%を達成できました。集計報告の遅れたことをお詫びすると共に、ご協力に対しあつくお礼申し上げます。なお、未応募の方は今からでもお申込み下さるよう、重ねてお願い致します。

(1)集約状況（46年5月10日現在）

申込　七一名　四二四、六〇〇円
入金　五一名　三五五、六〇〇円

(2)申込内訳（敬称略）　＊印未入金

金田近二　一万円
村尾金二　一万円
近藤恒雄　一万円
河相　薫　一万円
増山清太郎三千円
森　健二　一万円
岡田謙三　一万円
柿原謙一　一万円
望月達夫　一万円
岩崎利一　二万円
日江井正己一万円
佐野茂雄　一万円
久保孝一郎一万円
根本　大　一万円
吉沢一郎　一万円
松木謙三　一万円
高橋要二　二千円
久保田礼二　一万円
鈴木英雄　一万円
堀岡　清　一万円
黒田正治　六千円
小林重吉　一万円
佐々木誠　一万円
大塚　武　一万円
宮城恭一　五千円
山田亮三　一万円
佐藤政雄　三千円
高野秀雄　三千円＊
小林正直　二千円＊
三股　宏　三千円
竹中　彰　三千円＊
高崎俊平　三千円＊
蛭川隆夫　三千円＊
半場三雄　三千円＊
池知昭洋　三千円＊
佐藤久尚　五千円＊
岡田健志　三千円
中村雅明・加藤正（連名）　一万円
宮武幸久　二千円
池知、岡田、斉藤、田沼　松下順吉　五千円
伯耆豊次　三千円
山崎　拡　三千円
吉田義則　三千円
石和田四郎三千円＊
勝田有恒　一万円
上原利夫　三千円
中島　寛　五千円＊
石　弘光　一万円
鈴木　肇　五千円
小林茂雄　七千円
樋口　洪　三千円
伊藤恙生　三千円
松尾寛二　五千円
鈴木克夫　五千円
柴崎　新　五千円
大橋喜治　三千円
有賀　孟　五千円
大賀二郎　一千円
永井新也　三千円
倉知　敬　三千円＊
中橋寿雄　三千円＊
高橋信成　三千円＊
長沢道彦　三千円＊
山本溢弘　三千円＊
石田信隆　三千円＊
原　博貞　三千円＊
吉川晋平二千円
己・金成剛　竹中　彰　三千円＊
俵　昭　五千円＊
村上泰介　宮武幸久　二千円
他に富士フイルム㈱より支給を受けた平川君捜索費用の実費精算残額一万二千百円を、関係者（石藤、羽部、金子、井草の各氏。他の方々は、甲斐駒遭難対策費として既に寄付済）の了解を得て、本基金に繰り入れた。

(3)運用方法

基金の保全、運用については、検討中。

○名簿（一九七〇年版）発行
昭和45年11月9日送付

○コーチャー会
昭和45年12月11日
場所　如水会館ロビー
出席　大賀、池知、加藤、羽部、金子、井草
冬山合宿の計画について、12月7日のコーチャー会に引き続き検討、梅池のスキー合宿で自重することにしたい。勝田部長に電話連絡しOKをもらう。

○北岳OB合宿
昭和45年12月29日～46年1月4日
参加　中島寛、佐藤久、加藤、岡田、宮武
行動　第四尾根登攀

○会報発行（28号）
昭和46年2月3日発送

○幹事会・若手OB会
昭和46年4月20日
場所　如水会館ロビー
出席　大賀、倉知、高橋信、三森、高崎、池知、石田、佐藤久、原、岡田、金子、（学生）西牟田、井草、松尾、西田
議事
(1)会計　4月20日現在、会費納者は三九名で、依然僅少。学生に対する支給金にも苦しんでいるので、年度末までに鋭意集金に努める。
(2)会報　45年度は27、28号の二回しか発行していない。29号を五月末、30号（平川君追悼号）を六月末に続けて出し、年間四回の実績に何とか持込みたい。
(3)山行　45年8月鏡平、46年1月北岳、二回実施。5月22～23日、皇海山に小規模の懇親山行を行なう。
(4)総務　遭難対策基金カンパを集約中。
(5)学生　45年11月秩父縦走、46年1月栂池スキー合宿、5月鳳凰三山から北岳。橋本君の追悼文集ほゞ完成。
(6)針葉樹14号　別掲のように編集メンバーを一新して年度内発行をメドに努力。

○針葉樹十四号新編集者会議（第一回）
昭和46村5月10日（月）
場所　如水会館ロビー
出席　倉知　高崎　岡田　宮武　井草
議事
編集委員を新たに決め、気分一新して精力的な活働に入った。
(1)内容（案）
昭和39年～46年の部活動記録、ミルサミール及びサラグラール遠征記録、物故会員10名の追悼文、五十年略史。
(2)予算　百万円（一〇〇〇部）？　ニュー・ヨークに
(3)次回打合せ　5月26日　会合に出席して頂け

○針葉樹14号編集会議（第二回）
昭和46年5月26日
場所　住友化学会議室
出席　中村　井草　岡田
○消息（七〇年版名簿以後、文責大賀）
吉沢一郎氏　46年4月25日～5月9日　エベレスト観月旅行（詳細次号）。
大塚武氏　45年11月、北洋相互銀行に異動、三度目の札幌生活に入られた。
鉾木肇氏　46年2月　東京本社に転勤された。
小林茂雄氏　45年9月　名古屋の本社に単身赴任された。
田中一雄氏　45年10月　ニュー・ヨークに又も転出、在日中ついに会合に出席して頂けなかったのは、幹事としては心残り。
新井慶司氏　46年5月、広島から高崎に転勤、Y中氏と一杯やられた由。
景山豪治氏　45年11月　十年ぶりで四国から東京に帰られた。
山本健一郎氏　46年1月、新橋支店に帰られた。家の近い原、会社の往復に前を通る大賀には、無言の重圧。
中西厳氏　44年頃、約十年ぶりで東京に帰って居られる。

中島寛氏　46年1月　長銀に入社として勉強中。もはや、団体（JAC）役員ではありません（昨秋の国勢調査では、「仕事探し中」なる項に該当されたそうですが）なお、45年11月29日には、長男も出生。

有賀孟氏　46年1月23日結婚、八丈島に新婚旅行の二日目、奥さんが盲腸炎に罹り入院、一人で島めぐりをして来た由。それでも、十数年ぶりで月にはパパになる予定。

宮本英治氏　46年2月　これ又、北海道から東京にカンバック。

竹中彰氏　46年4月　労組専従となり、針葉樹会幹事は非専従化。

半場三雄氏　46年初？　勧銀を退社、浜松で自営の道に入る。

山本溢弘氏　46年春　突如、住友セメントよりブリヂストンタイヤに転職。

斉藤正氏　46年4月　札幌に転勤。

中村雅明氏　46年4月18日結婚。

ございます。

（八頁上段よりつゞく）

は事前に大したトレーニングもしていなかった以上の上首尾である。今更一冬に数尾根を登ったからといってどうこうとは思わないが、私にとっては久し振りに充実した山行ができたことと、昭和十二年の冬、我々の大先輩である小谷部さんにより初登攀された四尾根を三十数年ぶりに我々の手でトレースできたことがこのうえもなくうれしかった。

こうして今度の山行

（参考）　四尾根登攀のタイム

テント（六・二〇）――取付テラス（九・四〇―一〇・〇〇）――第ニコル（一二・〇〇）――稜線（一三・〇〇）――穂高箱のコル（一四・〇〇）――発攀終了（一七・三〇）――テント帰着（一七・三〇―五・四〇）

会務報告（続）

（四六年六月―）　大賀二郎

○評議員会

昭和46年6月3日（木）午后6時半

場所　如水会館小集会室

出席　（評議員）望月達、山田亮、久保、松下、伊藤恙、吉沢一、大、（幹事）中橋、石田、大賀

議題　年次総会提案事項の審議

○四十六年度年次総会

昭和46年6月15日（火）午后6時半

場所　如水会館第二食堂

出席　中川孫、吉沢一、村尾、松木、近藤、冠木、望月達、榎本、日江井、佐野、久保、松下、石井、山本健、岡垣、渡辺嘉、有賀、大賀、大、倉知、高橋信、竹中、三森、山本溢、石田、岡田、俵　以上二十七名

（委任状）金田近、高木、高橋要、金田一、河相、宇佐美、久保田、吉沢松、小川竹、増山、丸茂、清水達、堀岡、豊田、黒田正、柿原、松浦、佐々木、大塚、宮城恭、深谷、山田亮、櫻淵、佐藤政、根本、森一、鈴木鑓、小林茂、伯耆、樋口、島影、小

川宣、中村正、南昌、鈴木克、勝田有、甘利、春日井、吉沢貞、南亮、柴崎、中村幸、上原、沢木、景山、大橋喜、江面、大橋一、峰高、中島寛、石、小林正、永井、山本尚、三股、三井、宮本、朝木、遠藤、臼井、多田、蛭川、後閑、村上、長沢、中橋、本間、小野、高崎、半場、池知、佐藤久、原、斉藤正、吉川、田沼、中村雅、加藤、金成、宮武、金子、以上八十二名　計百九名を以て成立。（学生）西牟田、井草、西田、江藤

議　事

(1)開会あいさつ（望月会長）

(2)45年度決算報告（別掲）……承認

(3)45年度活動報告（別掲）……承認

(4)評議員一部改選……選出

（新任）山田亮三、高崎俊平

（退任）大塚武、三森茂充

(5)幹事改選……選出

代表幹事　大賀二郎（再）

総務　有賀　盈（新）、中橋寿雄（再）

会計　長沢道彦（新）、石田信隆（再）

会報　高橋信成（新）、岡田健志（再）

山行　中村雅明（再）、加藤正己（再）

学生　三森茂充（再）、倭　昭（新）

顧問　望月達夫（総務・再）、原田豊（会計・再）、伊藤恙生（同・再）、吉田義則（同・再）、上原利夫（同・再）、渡辺嘉佑（同・再）村尾金二（会報・再）、山田亮三（山行・再）、中島寛（学生・新）

(6)46年度行事計画（別掲）……承認

(7)46年度予算案（別掲）……承認

(8)針葉樹14号発行計画……承認

(9)山岳部45年度決算及46年度予算案……承認

懇談　吉沢氏のエベレスト旅行スライド、冠木、榎本、石井、山本健、中川孫各氏のスピーチ。

（了）

会費の振込は左記へお願いします。

三菱銀行本店サービスコーナー

針葉樹会

口座番号　四〇一七五二九

＝編集後記＝

一月に出していただいた冠木さんの原稿をようやく活字に出来ました。申し訳ありません。

×　×　×

今回が最初の編集です。頑張りますから原稿寄稿を期待しています。

×　×　×

表紙写真説明

今年正月OB合宿にて、北岳バットレス。

針葉樹会　会計報告並に計画

会計報告〔昭和45年7月1日～昭和46年5月31日〕					予算	
		44年度	45年度	増減	46年度	備考
収入	前期繰越	4,859	37,806	32,947	55,294	
	会費	350,500	237,500	△113,000	350,000	
	雑収入	162	14,273	14,111	—	
	合計	355,521	289,579	△ 65,942	405,294	
支出	会報発行費	59,795	91,025	31,230	120,000	年4回
	50年史準備金	(恵征委員会費) 85,452	50,000	—	50,000	
	山岳部補助	100,000	57,200	△ 42,800	100,000	
	懇親山行費	4,230	0	△ 4,230	20,000	年2回
	通信費	21,608	4,900	16,708	20,000	
	印刷費	9,780	23,300	13,520	30,000	
	事務費	23,720	5,600	△ 18,120	35,000	会費収入見込の1割計上
	雑費	13,130	2,260	△ 10,870	20,000	
	合計	317,715	234,285	△ 83,430	395,000	
繰越		37,806	55,294	17,488	10,294	

〔収入明細〕

○会費
- 会費　234,500
- 中川氏　3,000

○雑収入
- 預金利息　2,193
- 諸会合残金　10,080
- 香典戻り　2,000

〔支出明細〕

○会報発行費
- 2728号印刷費　49,920
- 〃　発送費　10,105
- 名簿発行費　31,000

○山岳部補助
- 山岳部会計報告御参照

○通信費
- カンパ封筒代　2,800
- 総会通知葉書代　2,100

○印刷代
- カンパ依頼文　17,300
- 総会通知　6,000

○事務費
- 封筒代　2,600
- 学生集金費　3,000

○雑費
- タクシー代その他　2,260

公正安当なものと認めます。

会計監査　村尾金二

岩田義則

活動実績と行事計画（案）

1971. 06. 01
幹　事　会

年/月	45年度活動報告	年/月	46年度行事計画（案）
1970/07	総会開催	1971/06	会報29号発行 総会
08	鏡平・滝谷懇親山行	07	会報30号（平川君追悼号）発行
09	会報27号発行 甲斐駒遭難救助活動	08	夏山懇親山行
10	臨時総会 遭難対策基金カンパ実施	09	敬老の日ハイキング
11	名簿発行	10	会報31号発行
12		11	ハイキング 月見の宴
1971/01	北岳パットレス合宿	12	忘年会
02	会報28号発行	1972/01	雪見登山 会報32号発行
03		02	作品展
04		03	
05		04	ハイキング 会報33号発行
		05	
NOTE	• 1971.5. 針葉樹14号編集委員会 本格活動に入る		• 部室修理の実施 • 14号の発行 • 50年史着手